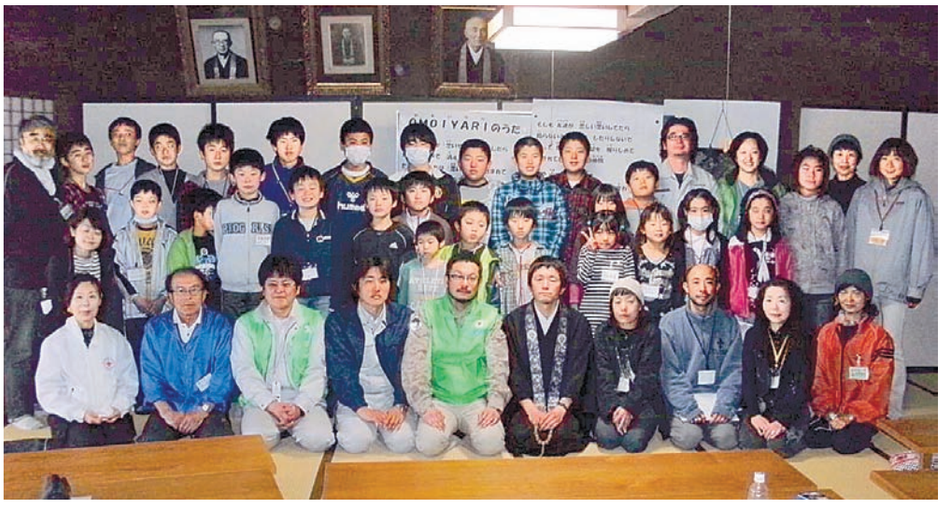
被災寺院で寺子屋



「楽しい！」と広がる笑顔

地元ＪＣとボランティアセンターが実施

南相馬市・常福寺　学校再開まで会場提供

福島県南相馬市の原町青年会議所（ＪＣ、田中章広理事長）は4月14日から21日まで、子どもたちに学んで遊べる場所を提供しようと、同市原町区・常福寺（廣橋敬之住職）で「なんだべ寺子屋」を開いた（写真）。

福島第1原発事故の影響で小・中学校が再開されず、避難生活や屋内退避の長期化によるストレスに苦しむ子どもたちに、学習の場を求める声が保護者から上がり、同寺門徒で同市議会の山田雅彦議員と廣橋住職が連絡を取り合い会場提供を決め、同ＪＣと同市ボランティアセンターが行った。

放射能の影響で多くの児童・生徒が県外などへ転出する中、寺子屋には連日35人ほどが通った。同センターに所属し教員免許を持つボランティアや学習塾講師らがゲームや自主学習を行い、子どもたちは「楽しい！」と笑顔で過ごした。最終日、廣橋住職が「つながり」について話し、寺子屋を満喫した子どもたちはスタッフへ感謝を込め合唱を披露した。

山田議員は「廣橋住職には快く会場を提供していただき感謝している。昔、お寺は子どもたちの居場所だった。今回短い間だったが、お寺に子どもたちの元気な声が響き渡り、うれしかった」、田中理事長は「お寺という雰囲気が子どもや保護者に安心感を与えた。今後も地域のためにできることがあれば協力したい」と話していた。

廣橋住職は「地域の子どもたちのために利用してもらえてよかった」と笑みを浮かべる一方で、「原発の不安はぬぐいきれない。作業に携わっている人たちの苦労は計り知れないが、何とかねぎらう方法はないか」と訴えた。

子どもたちは4月22日から、同市北部で再開された小・中学校に通えることになったため、寺子屋は21日までとなった。同寺は寺子屋閉校後、再開されていない幼稚園や保育園に通う子どもを持つ親たちを支援するため、同市社会福祉協議会に「託児所」として広間を提供している。

同寺は地震で山門の一部破損などはあったが、本堂や庫裏には大きな被害はなかった。4月15日には門信徒の要望で五七日法要を営み、門信徒や地域住民ら200人が参拝。28日には光慶寺（同市）、常福寺（浪江町）と合同で四十九日追悼法要を営んだ。また、5月5日には周囲の要望もあり、恒例の「花まつり」を開催。廣橋住職は寺子屋の子どもたちにも参拝を呼びかけた。